

# 革命通信

76号 5.1  
100円

共産主義者同盟  
赤軍派  
マルクス・レーニン主義  
編集委員会

## 反霸権・反米ソの国際路線を高々と掲げ、 中国共産党の走資派批判を断固支持せよ！

現代過渡期世界に於ける世界革命、共産主義革命の戦略は、いうまでもなく、反帝反社会帝である。現在、この世界革命戦略は、第一に、ベトナム・インドシナの民族民主革命の勝利の後、もっとも激しい階級闘争、革命と戦争の一時代という激動期に突入したこと、

第二に、継続社会主義革命、民族民主革命、社会主義革命が前進し、反帝反社会帝の世界革命の社会的条件が急速に形成されていること、第三に、米ソ二大帝国主義の霸権争奪戦が欧州を中心にして全世界規模で拡大し、第三次大戦の危険が増大し、地域分割戦がはじまるとしていること、第四に、この争奪戦が、革命闘争に多大の影響を与えていていること。特に、ソ連が「十月革命の国々連」という幻想を利用して、侵略の野望をおしかくし、第三世界の民族民主革命に近づき、「軍事援助」をすると同時に修正主義を輸出し、革命的性格をブルジョア的に変質させている、という四つの条件に規定されて、反霸権反米反ソとして鋭角的、具体的に突き出されねばならない。(1) 一九一七年ロシア10月革命を転回軸として世界史は資本主義社会から共産主義社会への過渡期に突入した。レーニン指導下のロシア共産党とプロレタリア人民は、生まれたばかりのソビエトロシアを(1)フランス・イギリス・ドイツ・日本等の諸帝国主義の反革命干渉戦争から、(2)国内の反革命勢力から、防衛し、勝利した。一九七六年の今日、過渡期世界は大きく変貌した、と同時に、ますます共産主義社会に近づいている。過渡期世界が大きく変貌した第一の理由は、社会主義国ソ連が社会帝国主義に変質し、資本主義陣営に走ったこと、第二の理由は、中国・ベトナム・朝鮮民主主義人民共和国がソ連の変質・転落に抗し、社会主義国家を防衛し、継続社会主義革命を組織しぬき、革命の策源地として自己を打ち固めていること。第三の理由は、革命闘争の最前線が先進諸国の社会主義革命から中国・ベトナム・朝鮮民主主義人民共和国を後方とする第三世界の民族解放民主主義革命に移つたことであった。その結果、現代過渡期世界には四つの矛盾が存在する。

第一は、被抑圧民族と帝国主義、社会帝国主義との間の矛盾。第二は、資本主義、修正主義内部のプロレタリア階級とブルジョア階級との間の矛盾、第三は、帝国主義と社会帝国主義との間および各帝国主義国との間の矛盾、第四は、社会主義国と帝国主義、社会帝国主義との間の矛盾である。ベトナム・インドシナの民族民主革命戦争以後、この四つの矛盾が絶対的に激化する中で、とりわけ、第一と第三の矛盾が相対的に一層急速に一層激しく深化している。そして一九三〇年代、四〇年代の中一後半期と同規模の、いや、それ以上の深さと広さの全世界的革命情勢に直面している。革命が戦争を打ち破るのか?! 戦争が革命を打ち破るのか?! の一大階級決戦の情勢

が始まっているのだ。

(2) 帝国主義と社会帝国主義との矛盾、具体的にいえば、米帝とソ連帝との矛盾は激化し、激しい市場再分割戦をくりひろげている、同時に、地域再分割戦の危険が増大している。ソ連帝はブルジョア階級独裁下の国家独占資本主義である。スターリンのカウッキー主義への転落を右翼的に固定化したブレジネフ・コスイギン等の現代カウッキー主義・修正主義者が全国家機構を掌握し、資本主義的利益潤の原則を導入し、社会主義的所有制をブルジョア階級の所有制に変質させ、社会主義経済を国家独占資本主義に変質させたのである。ソ連帝は、「開発援助」の名を借りて、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国に植民地拡張政策をすすめ、不等価交換によつて多額の利潤を得るとともに、資源をもかすめとつて、そして、威信が低下し、市場競争力も低下している米帝にかわり、國際帝国主義の盟主になろうとねらっている。ソ連帝は、口では軍縮をとなえているが、たえず軍事費の支出をふやしつづけ、国民生産総額の四割から五割を直接・間接に国防関係の費用として使つてゐる。「東を撃つとみせかけて西を撃つ」作戦の下、ソ連帝軍の約3分の2が歐州戦線に配置されている。他方、米帝は、ベトナム・インドシナ人に敗北し反革命指揮棒の威力が低下する、と同時に、国内経済が恐慌的様相を深め、産軍復合体制を再編強化せざるを得なくなり、寄生性と腐朽性がますますあらわになる中で、反革命世界体制の再編・維持・強化を必死に行ない、世界の全ゆる地域で侵略と反革命、戦争を開拓している傷ついた世界最大の帝国主義である。かくて、米ソ二大帝国主義の霸権争奪戦は、欧州を中心に全世界に拡大している。第三次大戦の危険が増大し、いよいよ不可避的現実になりつつある。この第三次大戦から日本が自由であるわけがないのだ。

(3) 被抑圧民族と帝国主義、社会帝国主義との間の矛盾は、ベトナム・インドシナ民族民主革命戦争が勝利した後、一段と深まり拡大している。中国、ベトナム、朝鮮民主主義人民共和国などの社会主義国を策源地とする民族解放闘争は、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの等三世界全域に拡大し、帝国主義・社会帝国主義と封建的地主階級、買弁ブルジョア階級との闘いを強化している。南朝鮮人民は、朴カイライ政権打倒と日・米帝退放の社会主義革命を急速に転化する民族民主革命に直面し、反動の嵐の中を前進している。パレスチナ人は、PFLPを中心とする拒否戦線派の指導の下、米ソ二大帝国主義の霸権争奪に反対し、シオニスト・イスラエル打倒とアラブ反動派打倒の民族民主革命に直面している。日和見主義、修正主義、投降主義のアラブアタ派の影響力は低下してゐる。アンゴラ人

民は、MPLAの指導の下アンゴラ人民共和国を戦取し、更に、モザンビーク・ギニア・ピサウ人民と連帶し、南アフリカの民族民主

## 二、日本革命の戦略問題

民は、MPLAの指導の下アンゴラ人民共和国を戦取し、更に、モザンビーク・ギニア・ピサウ人民と連帶し、南アフリカの民族民主革命を推進している。ビルマ・タイ・マレーシア・インドネシア・フィリピンの人民は、反霸権・反米・反ソの国際路線を掲げた。革命党の指導の下に、各国の特殊性、個別性を踏まえた独自の戦略を打ち立て、断固として民族民主革命を闘い抜いている。このように、第三世界の民族解放闘争は前進している。そして、反霸権・反ソ・反米の国際路線の正しさが証明されつゝあるのだ。アンゴラの民族民主革命にしても、それをとどん行えば、必ずソ社会の霸権主義・新植民地主義との対決へと発展するのだ。

④ 米ソ2大帝国主義の霸権主義と第三世界の民族解放闘争に直面し、二流の帝国主義は政治的経済的危機にみまわれ、縦じて統治形態を反動化し、被抑圧民族に矛盾を転化し侵略と反革命を強化すると同時に、帝国主義間の矛盾を激化させている。西欧では、スペイン・ポルトガルの社会主義革命に急速に転化する民族民主革命に直面し、米ソ2大帝国主義の霸権主義の主戦場になつていることでプロレタリア階級独裁樹立、社会主義革命にむけた革命的情勢が端的に始まっている。これに対し、独・仏・伊帝国主義は、スペイン・ポルトガル・ギリシャへの侵略・反革命を強化し、ポルトガル民主主義革命を変質させ、封建的地主階級とブルジョア階級の妥協を計る、とともに、自国の「共産党」を容帝反共主義の民間反革命として組織し、ファシズム的統括形態に転化しつゝある。他方、独帝と仏帝は、イタリア市場を巡り激しい分割戦を行ない、帝国主義間矛盾を激成している。その結果、イタリアでは、伊帝の危機がますます深まり、ブルジョア階級独裁の崩壊前夜的情勢に突入している。日本は、米・ソ霸権争奪戦の第二戦線である。しかし、南朝鮮の民族民主革命に直面し、恐慌の中で、社会主義革命の情勢が端的に始まっている。日帝は、米帝との矛盾を深める、とともに、共同して朝鮮侵略反革命戦争を実行せんとしている。そして、統括形態を天皇制ファシズムに転化している。これに対し、日本労働者階級は、反霸権・反ソ・反米の国際路線を掲げ社会主義革命にむけて革命戦争を闘う武装して闘う非合法党を建設し、日本革命の勝利に邁進している。

⑤ 社会主義諸国は前進し、中国共産党は、走資派を叩き出し、反霸権反ソ反米の戦列を打ち固めた。カンボジアは、民族民主革命でプロレタリア階級が主導する人民連合政権からプロレタリア階級独裁を撃とうと考へ12階級賃金制を導入し、社会主義的生産様式を資本主義的なものに変質させようとした。これに対し、毛沢東が高齢であることを良い事に野心をふくらませ、党と政府の権力を奪い取る、と同時に、米帝と妥協してソ社会主義革命に転化し、社会主義建設を自立更生の下に農業を基礎として行なうとしている。ベトナムは、労働者階級独裁を堅持し、南の社会主義革命を待ち、南北統一を実現し社会主義建設を推進せんとしている。朝鮮民主主義人民共和国は、朝鮮の革命的情勢に応え、予想されるあらゆる事態に備えている。中国は、米ソ2大帝国主義との「戦争にそなえ、自然災害にそなえ、人民のために」「深く地下道を掘り、いたるところで食糧を貯え、霸権を求めない」という国際―国内の路線の下に社会主義建設を戦取している。ところが走資派―その頭目―鄧小平は、米ソとの二重対峙戦を日和り、悪名高い「黒ネコ、白ネコ」論を再び持ち出し、周恩来が病氣で政治生活からしりぞき、毛沢東が高齢であることを良い事に野心をふくらませ、党と政府の権力を奪い取る、と同時に、米帝と妥協してソ社会主義的である。しかし、中国人民が、この事件で走資派の本当の姿を知り得たという意味で反面教師的意義をも有する。この反革命に対する、中国共産党と政府が、断固たる態度で臨み、鄧小平を全ての革命事件である。しかし、中国人民が、この事件で走資派の本当の姿を知り得たという意味で反面教師的意義をも有する。この反革命事件である。かくて、我々は、反霸権・反米・反ソの国際路線を高々と掲げる。そして、中国共産党的走資派批判を断固支持する。

⑥ 総じて、現代過渡期世界の情勢の特徴は、第一に、米ソ2大帝国主義革命を推進するという路線が勝つたことを意味する。

革命の第二次大戦の危険が増大していること、第二に、第三世界の民族民主闘争が前進していること、第三に、西欧・日本で社会主義革命の情勢が端的に始まっていること、第四に、社会主義諸国が継続革命を推進し、革命の策源地として自己を打ち鍛えていることである。かくて、我々は、反霸権・反米・反ソの国際路線を高々と掲げる。そして、中国共産党的走資派批判を断固支持する。

反霸権、反米・反ソの国際路線を、直接、無媒介に国内路線とするとはできない。各國の歴史的世界的地位と階級構成の特殊性を踏まえ、労働者階級の革命闘争に依拠して、再構成、定式化されなければならない。

a、朝鮮侵略反革命戦争を準備する、と同時に、b、統治形態を反動化し、象徴天皇制を内在化した特殊な議会制民主主義から天皇制

ファシズムに転化せんとしている。ここから、日帝の当面の反革命戦略は、米帝を巻き込んだうえで第一に、南朝鮮の民族民主革命を圧殺すること、第二に、第一のために社会主義革命派を先制的予防的反革命によって解体し、「国内平和」を実現すること、第三に、第一、第二を貫徹する中でソ社帝との戦争に備える、ということである。以上の反革命戦略を物質化するために日帝は、内部に親ソ派

を抱えつつも日米安保体制を強化している。他方、米帝も、ソ社帝との霸権争奪戦に勝ちぬくために南朝鮮から、日本から軍隊を撤退することができず、日米安保体制を強化せざるを得ない。つまり、

今日の日本社会は資本主義社会であり、日本資本主義は高度に発達した帝国主義であること。日本帝国主義は米帝に従属した復活帝国主義であり、日本の国家権力は安保体制の下、日帝と米帝の連合支配であること。そして、日帝と米帝、とりわけ前者の強力な支持の下、天皇制が存続しているのだ。

(4) かくて、今日の日本革命の戦略は、米帝からの民族解放を含む社会主義革命として確立されねばならないのである。それは、天皇制打倒・安保粉碎・日帝打倒・米帝追放・プロレタリア階級独裁樹立、社会主義革命として定式化される。日本労働者階級の現実の敵は、日帝と米帝なのだ。

(5) 我々は、この総戦略の闘争を朝鮮革命と結合してとことん推進する、同時に、第三次大戦が起りソ社帝が日本に電撃的に侵攻した場合の戦略変更に備え、北方領土や漁業問題を媒介にソ社帝の日本占領の危険性を暴露してゆく。何故なら、日本労働者階級にとってソ社帝は予想される敵であるからである。革命党と人民||社会主義統一戦線は、現実の敵とことん闘いぬくことで鍛えられ強固になる。そして、党と統一戦線の陣型が、強固に建設され、ソ社帝の批判と暴露が組織されていれば、情勢が急変し、ソ社帝が日本を占領しても、必要な戦略の変更が可能になる。「毛沢東思想」派の一部にみられる現実の敵との闘いを放棄し（日帝の朝鮮侵略反革命を容認している）、現実化していないソ社帝の侵略、占領をもちだす傾向は、党と統一戦線の陣型をつき崩し、予想されるソ社帝との闘争をプロレタリア革命闘争として組織するのではなく、最初からブルジョア階級と連合したディミトロフ的人民戦線の闘争を目的化している敗北主義、日和見主義なのである。

### 三、朝鮮革命と日本労働者階級の任務（その一）

① 反霸権・反米・反ソを現在の世界革命戦略とする、と同時に、天皇制打倒・安保粉碎・日帝打倒・米帝追放・プロレタリア階級独裁樹立、社会主義革命を国内の戦略的経路線として闘う日本労働者階級は、朝鮮革命と結合し、四つの任務を遂行せねばならない。

② 第一の任務は、朝鮮革命—朝鮮人民の自主的平和的統一闘争、南朝鮮人民の反日反米朴打倒の民族民主革命、在日朝鮮人の民族的隸属させ、あらゆる産業と労働力は日本の經濟侵略の犠牲のいにえにつくりあげた」と、激しく日帝を批判しているが、米帝に対しても述べていないこと、第二に、暴力革命を否定し、全問題を「現政権（朴カイライ政権のこと）は、この国をここまで引きずった責任をとらねばならない」との政権交代に摩り替えていたこと、

第三に、現在を「北の共産主義」「政権」と熾烈な競争の時代」と規定し、朝鮮民主主義人民共和国と朝鮮労働党に敵対していること、によって容米帝、議会主義の日和見主義的傾向を内包している。この「宣言」の意義は内容にあるのではなく、発表されたという事実

形態にあるのだ。民族ブルジョア階級が大統領緊急措置9号体制に屈服していないことが重要なのだ。そして、そのことによって南朝鮮の危機がどれほど深く広く人民を巻き込んでいるかが暴露されたのだ。つまり、人民の反日、反米、朴打倒の民族民主主義革命が不可避であり

爆発寸前なのだ。

(4) 日本のブルジョア・マスコミは、一貫してこの爆発から労働階級の目を、耳をそらし「朴政権は巻き返しに成功した」などとデマを飛ばし、3／1「民主救國宣言」も小さく報道したにすぎなかつた。社会帝国主義の完成としての社会排外主義は旧来の特權的地位を防衛するために、召還主義」「左翼同化主義は、空論的反スターリン主義のために、この反革命的デマに意図的に無意識的かは別にして便乗している。

(5) 南朝鮮に於ける朴政権は「半封建的地主階級と買弁ブルジョア階級を国内的基盤とした米・日帝のカライドであり、今日それは反動化している。米帝は、朴政権を手先にして、南朝鮮を(中國と朝鮮民主主義人民共和国に敵対する、(2)商品輸出のための、(3)安価な労働力を得るために最大の市場、最大の植民地にしている。更に、ベトナム・インドシナ解放以後のアジア情勢の大激動の中で、朝鮮侵略反革命を強化し、政治、経済面から軍事面にまで進出している。

(6) 朴政権下の南朝鮮経済は食糧輸入が増大し、石油価格が高騰したうえに、借款の元本、利子の返済・支払いが膨脹していく状況の中でかなり高い成長率を維持しなければならず、物価の上昇に對して労働者の賃金を低くおさえざるを得ず、深刻な恐慌に直前している。南朝鮮人民の生活状態が絶対的に悪化し、窮迫し、闘わねば生きられぬ状況が現出している。そして、その闘いの矛先は、当然にも、日帝と米帝、朴政権に向かっている。これに対し、朴政権は一方で、日「韓」米安保体制を強化し、他方で、朝鮮民主主義人民共和国との緊張関係を不斷に作り出すことによって、「北の脅威」という名目の下に国内予備を封じ込め、対外矛盾に転化せんとしている。

そのため朴は、南朝鮮人民に對して「北の南進脅威」「韓国は事実上の戦争状態である」とアジリ、危機感を煽り、北進にむけた大統領緊急措置9号等の弾圧法を設置し、全南朝鮮人民を国軍・郷土予備軍・民間防衛隊・学生護国団に強制的に編入している。しかし、こうした超反革命体制をのり越えて民族民主革命は前進している。

(7) 反日反米朴打倒の民族民主革命が勝利するのは、プロレタリア階級の主導の下に、農民が同盟して闘う場合だけである。プロレタリア階級は、農民と同盟し、この労農同盟を中心にして民族民主統一戦線を結成し、それを主導し、革命戦争（暴力革命の特殊的形態）を闘い民主主義||最小微額を実行する人民民主主義独裁を樹立して、民族民主革命を完遂し、次に、この権力を社会主義革命、社会主義建設を実行するプロレタリア階級独裁に転化し、継続社会主義革命に突入する、と同時に、朝鮮の南北統一を行なう。

(8) 朝鮮労働党が提起している「自主的平和的統一」とは、南朝鮮の民族民主革命を前提にした上で、第一に、外国勢力、帝国主義を排除すること、これが「自主的」という意味、第二に、南北統一を平和的に実現すること、これが「平和的」という意味である。この提起は、全く正しい。

(9) 在日朝鮮人は、民族的民主的権利を奪取する為に、日帝と朴政権||K C I Aと激しく闘っている。それは、在日韓国人民留民団神奈川県本部に対する朴成準一派の不当占拠事件に対する在日朝鮮人のすばやい対応一つみてもいえる。

(10) かくて、日本労働者階級は、朝鮮人民の民族自決権を承認し、朝鮮革命を断固支持せねばならないのである。

(1) 第二の任務は、朝鮮革命と結合し、日帝の朝鮮侵略・反革命を革命戦争に転化し、天皇制打倒・安保粉碎・日帝打倒・米帝追放・プロレタリア階級独裁樹立・社会主義革命に突き進むことである。

(2) 昨年の8月6日、フォード・三木会談で「新韓国条項」が再確

認された。これに基づき、9月、日帝と朴政権は、第六回日「韓」

閣僚会議で(1)「総力安保」「臨戦体制」「北の脅威」の確認、朴政権の護持に向けた全ゆる援助を日帝が行なうこと、(2)金大中氏事件、「民青学連」事件の政治的決着、(3)それを引き金とした在日朝鮮人の政治活動、政治組織の解体と抑圧、(4)それによる非合法化と民団内反朴勢力への弾圧強化、(5)政府閣ベースでの援助の継続(3億ドルの「經濟援助」)をおこないつつも、民間レベルでの直接投資を無制限に受け入れること、を確認した。以上の事は何を示しているか。第一は朴政権—カイライ体制の危機であり、第二は、米日帝国主義が朝鮮の安全のためという名目の侵略反革命戦争を準備していること、第三は、米帝よりも日帝が南朝鮮の侵略反革命を行なっていること、である。

(3) 南朝鮮の民族民主革命の爆発に対して、朴政権の延命の道は、二つしかない。第一の道は、国内の反革命をとことん組織すること、第二の道は、朝鮮民主主義人民共和国へ侵略反革命戦争を発動することである。どちらの道になるかは、革命戦争の具体的進展にかかっていいる。しかし、朴政権がどちらを選択するにしても、日帝の朝鮮侵略反革命戦争は発動される。何故なら、この二つの道は、日米帝が朴政権—カイライ体制の護持のために参戦することを前提にしているからだ。かくて、日帝の朝鮮侵略反革命戦争が不可避になりつゝある。ソ社帝は、この戦争に介入し、日本を侵略せんと目論んでいる。

(4) 現在の日本の国内情勢の特徴は、第一に、ブルジョア階級が議会制民主主義的統治形態ではその支配を維持することが困難になり(1)朝鮮侵略反革命戦争のために、(2)社会主義革命のために、天皇制を政治の前面に登場させ、これと軍隊・官僚・警察を結合し、天皇制ファシズム的統治形態に転化する中で、それを反動的に打開せんとしていること、第二に、この反動的攻撃がブルジョア階級の政治危機、亀裂をつくりだし、それにそつて労働者労働大衆の貧困と激昂が「やぶれ出る」情勢がいよいよ近づきつつあること、第三に、賃金統制による搾取と、産業と行政機関の合理化による抑圧、インフレと投機による収奪がますます強まり労働者労働大衆の政治的「活動性」がいちじるしくたかまりつゝあること、第四に、継続社会主義革命と第三世界の民族解放闘争が前進する、と同時に、霸權争奪戦が激化し、日帝の体制的危機が深まる中で、労働者労働大衆の政治的情勢が「普通以上に」激化し始めたこと、革命的情勢が端的に始めていて、全身心を(1)朝鮮侵略反革命戦争体制の構築と(2)統治形態の天皇制ファシズムへの転化にかけている。(1)にとって、(2)による「國內平和」が前提であり、また、(2)にとって(1)は、大衆を天皇制ファシズムの下に組織するための手段であり、危機突破の目的もある。しかし、日帝の朝鮮侵略反革命戦争は、第一に、南朝鮮の民族民主革命の爆発、第二、日本労働者階級の社会主義革命の前進によって(1)(2)の完成を待たず発動される。要するに日本帝国主義は、ブルジョア階級独裁の危機を「上からの内乱」の手段によつて乗りこえようとしているのである。その中で、右翼と民間反革命は警察の遊撃隊として育成され、社会主義革命派に対する襲撃を激化している。

(6) これに対し、日本労働者労働大衆は、全戦線で反撃を開始しつつあり、政治的活動性がいちじるしく高まっている。(1)国家独占資本の下の労働組合(公労協)に組織された労働者の闘争が、修正主義、社「共」の支配を突破して爆発し、(2)民間独立資本の下の労働組合で帝国主義的労働運動(同盟、I MF・JC)の支配が搖ぎ始め(3)被差別部落大衆、被抑圧少数民族、社外工、臨時工、中小零細企業の労働者などの闘争が激化している。このように労働運動が革命的に高揚し始めている、と同時に、大衆的政治闘争が、第一に、朝鮮

侵略・反革命と戦争に対する闘争、第二に、反動化に反対し、天皇制ファシズム的統治形態に反対する闘争、第三に、国独資の下での搾取と収奪、抑圧に反対する闘争を三大水路として発展・爆発している。(7) 今日の日本の情勢は、革命的情勢が端的に始まっているといふことであるが、情勢そのものの過渡性、端初性に規定され、きわめて流動的である。かくて、労働者階級は、日帝の朝鮮侵略反革命戦争に向けた「上からの内乱」的攻撃に対し、朝鮮革命と結合し、勤労大衆の闘争の高揚を踏まえ、朝鮮侵略反革命を革命戦争に転化し、戦争を革命戦争で打ち破る革命的陣型を準備する中で、天皇制打倒、安保粉碎・日帝打倒・プロレタリア階級独裁樹立・社会主義革命に突き進まねばならないのである。

(8) かつて、レーニンは「自國政府の敗北」の中で「戦時における革命は内乱」である、といった。戦時とは、具体的にいえば、第一次大戦期のことであり、内乱とは「つまり、抑圧階級にたいする被抑圧階級の戦争、奴隸所有者にたいする奴隸の戦争、地主にたいする農奴の戦争、ブルジョアジーにたいする賃金労働者の戦争」のことである。だから、帝国主義戦争と内乱は統一的に把握されねばならない。「帝国主義戦争を内乱に転化せよ」という革命的戦術は、眼前に起きている帝国主義戦争をいかに革命に転化すべきかという革命的現実主義から打ち出されたのである。労働者階級は、情勢の過渡性を踏まえ、日帝の朝鮮侵略反革命戦争が(1)南朝鮮の民主革命と(2)体制的危機の深刻化の中で不可避になつて現実を直視し、「戦時の革命は内乱」と異なる革命的戦術、すなわち、「朝鮮侵略反革命を革命戦争に転化し、戦争を革命戦争で打ち破れ」の下、戦略的経路線の闘争をとことん突き進まねばならない。しかし、革命戦争の特殊日本の条件に規定され、当面「朝鮮侵略反革命を革命戦争に転化」せよ、が強調されざるを得ない。何故なら、この革命戦争の特徴は、第一に、日本革命の当面の目的であるプロ独立樹立、社会主義革命の実現を射程とした労働者階級が指導する全民的戦争であること、第二に、ブルジョア階級・支配階級が軍事力を独占している、と同時に、労働者労働大衆が思想的にも武装解除されており、最初から、党とそれに指導された赤軍が存在しないこと、の三つの理由から、まずプロレタリア階級独裁の集中的表現である革命党のゲリラ戦から開始されるということである。つまり、党と統一戦線から出発し、革命党のゲリラ戦の展開の中で、統一戦線を打ち鍛え、軍事組織である赤軍を建設するということだ。ゆえに、労働者階級は、まずもつて、革命戦争の初期的条件を創出すべく「朝鮮侵略反革命を革命戦争に転化」せねばならないのである。

## 五、朝鮮革命と日本労働者階級の任務(その三)

(1) 第三の任務は、朝鮮革命の革命的情勢が日本に連動し、革命的情勢が端的に始まっている中で、革命的情勢に対する三大義務(3)三大任務を果す革命党を創建することである。

(2) レーニンは、「第二インタナショナルの崩壊」の中で、革命的情勢に応じた革命党の三大義務を明らかにした。革命的「情勢はながくもちこたえるであろうか、そしてなおどれほどはげしくなるであろうか?」それは革命にいたるであろうか、われわれはそれを知らないし、だれも知ることはできない。……いま問題となつているのは、すべての社会主義者のもつとも議論の余地のない、もつとも基本的な義務、すなわち、革命的情勢が現存することを大衆に明らかにし、この情勢の広さと深さを説明し、プロレタリアートの革命的情勢に応じる組織をつくりだすという義務である」「人民を鼓舞し、「ゆりうごかし」(プレハーノフ・アクセリロード・カウッキーがやっているように排外主義をもつてねむりこませないで)資本主義の崩壊を「はやめる」ために危機を「利用」し、コンミューーン

と一九〇五年十月—十二月の先例を指針とすべきである、と。こんにちの諸政党が自分のこの義務を履行しないのは、それらの党の裏切りであり、政治的な死であり、自分の役割の放棄であり、ブルジョアジーのがわに寝がえることである」。レーニンが提起した第一の義務は、革命的情勢の存在を大衆の前に撤底的にあきらかにすること、第二の義務は、労働者労働大衆を革命的行動にうつらせることが、第三の義務は、合法性への隸従とは手を切った非合法組織の建設である。この三大義務を、今日、三大任務として継承・発展せねばならない。第一の任務は、三大水路として発展・爆発している政治闘争に、革命的宣伝・扇動をもちこみ、遂行せねばならないこと。第二の任務は、日帝が天皇制ファシズム的統治形態への転換を目指し、反動化し、予防反革命に着手し、「上からの内乱」を組織している以上、下からの内乱、プロ独、社会主義革命を当面の目的とする社会主義革命戦争を組織すること。第三の任務は、中央集権主義を組織原則にし、職業革命家の組織を中心とした武装して闘う非合法組織を建設すること、である。

(3) こうした三大任務を遂行する革命党の型の特徴は、第一に、中央委員会が思想と実践を統一的に指導することである。レーニンは思想指導する編集局と、実践指導する中央委員会という二つの指導機関を設立した。しかし、それは、レーニンも認めた如く、中央集権主義への妥協であった。中央集権主義を組織原則とする武装して闘う党では、中央委員会が、思想と実践を統一的に指導するので二つの指導機関は必要でない。第二に、中央委員会と地方委員会が指導機関であることだ。經營細胞を基礎にし、公開性と選挙制の民主主義を組織原則とするスターリン的党組織觀を批判し、職業革命家を中心にして、任命制の中央集権主義を組織原則とする武装して闘う党にとって指導機関は、中央委員会と地方委員会だけである。第三に、指導機関の下に、執行機関である地区グループ、工場内下級委員会と運動全体に奉仕する特殊なグループが組織されることだ。革命的扇動宣伝と武装闘争は、指導機関の責任の下、執行機関、とりわけ地区グループが担うのである。かかる型を特徴とした革命党によってのみ三大任務は有機的に統一される。労働者階級は、三大義務を三大任務として豊富化し、武装して闘う非合法党の創建に驅進せねばならないのだ。

## 六、朝鮮革命と日本労働者階級の任務（その四）

- (1) 第四の任務は、社会排外主義を粉碎し、召還主義を批判することである。
- (2) 日帝の体制的危機がいよいよ深まり、朝鮮侵略反革命が不可避になり、第三次世界大戦の危険が増大する中で、日本国内の社会帝国主義潮流は、今までどおりの存在をつづけられなくなり、社会排外主義に転落し、朝鮮革命に敵対している。「日共」—宮本一派は、イタリア「共産党」、フランス「共産党」に追随し、プロレタリア独裁を「執権」に改悪し、ついに、綱領から取り消すまでに至った。それは、彼等が日帝と連合して南朝鮮の支配と中国の党と人民に敵対することを意味している。だから、完全な排外主義である。カクマルは、「日共」—宮本一派に対し「左」翼的批判を浴びせることで真実の姿をカモフラージュしている。しかし、彼らは、日帝が体制的危機を深めていることを否定し、美化し朝鮮侵略反革命戦争の不可避性がまるで理解できずいる。その結果、朝鮮革命と結合して日本革命を推進する社会主義革命派に敵対しブルジョア階級の手先になっている。だから、カクマルも完全な社会排外主義である。向坂協会・「日本の声」派は、ソ社帝の手先になり、日帝の朝鮮侵略反革命を経済援助だと強弁する、とともに、米帝を排除し日本をソ社帝に売り渡す立場から安保体制に反対している。彼らも完全な社会排外主義である。つまり、社会帝国主義の完成としての社会排外主義にも色あいの相違が存在するということだ。しかし、あくまで色あいの相違にすぎないということだ。「毛沢東思想」派の一部は、日帝と米帝の安保体制の再編強化が、日本人民と朝鮮人民に対するものであることを否定し、ソ社帝の侵略にそなえるも

のであると考えている。これは、社会排外主義の始まりである。  
(3) 召還主義は、革命的情勢に対する三大任務を、非合法組織の建設にきりぢぢめ、生き生きした革命的扇動宣伝を組織し、大胆に労働者労働大衆を政治生活に決起させる作業を放棄しているために、口では何といおうと、實際は、社会排外主義者の大衆に対する工作を全面的に容認しており、社会排外主義の第二戦線なのである。労働者階級は、社会排外主義・召還主義の「左」右の日和見主義と断固闘わねばならないのだ。

## 裁判闘争予定

5月6日、H J裁判、闘争。場所、東京地裁。

# 朴成準一派の反革命戦争

三月一日、朝鮮南部の民主抵抗人士の手によって、民主回復・朴独裁打倒への生と死を賭けた斗いの宣言」「民主救國宣言」が発せられた。「前進しよう！斗おう！死のう！そして打ち勝とう！」と朝鮮南部の労働者・学生・人民の反朴救國の民族解放・民主主義革命は、朴ファショ軍事独裁の死の弾圧を乗り越えて、今まさに爆発せんとしている。

そして、その日、日本に於ては、KICAとその手先＝朴成準一派によって民団神奈川県本部事務所が不当占拠された。

## 民団神奈川県本部事務所

### 不当占拠事件の本質

今回の朴成準（民団内親朴派）による民団神奈川県本部事務所不当占拠は、①KICA（韓国横浜総領事季起同）の直接的指揮の下に決行されたという点で、金大中氏ら致事件と同質のものであり、②日帝（神奈川県警・地裁）が黙認・擁護している点で、日「韓」権力の一件となつた在日朝鮮人にに対する弾圧である。今回の事件は決して偶發的・自然発生的に生起した事件ではなく、朝鮮情勢のひつ追とこれに対する日帝の介入＝朝鮮侵略・反革命の強化・戦争の準備という現下の階級情勢に規定された日帝と朴かいらの政権（在日KICA）の一体的・計画的攻撃に他ならない。

今回の事件の本質は、①ベトナム・インドシナ完全解放後の国際階級情勢の全重圧を集中的に受け、更には、朴庄政十六年間に累積されてきた国内予循の爆発という二重の重圧の中で「大統領緊急措置九号」というファショ支配を通してしかもはや「体制」を維持・延命しえず、体制的破局を突き進む朴かいらの軍事独裁体制が「韓」国内のみならず、在日「韓」国人への統制と弾圧を強めることを狙つたものであり、②ひつ追する朝鮮情勢に対し、③投下した資本の防衛と安価な労働力の確保＝新植地支配の維持・延命のために、④朝鮮南部をアジア反革命の軍事要塞に打ち固めるために朝鮮人民の自主的・平和的祖国統一斗争を打ち砕き、朝鮮南部人民の反米反日朴打倒の民族解放・民主主義革命を粉碎せんとしている日帝が、朝鮮人民の斗いの爆発を恐れ、斗いの爆発の予防反革命として、国内的に先行的に在日朝鮮人への弾圧と政治的統制を強化せんとして展開されたものである。

## 日帝の朝鮮侵略・反革命戦争の

### 国内的先行的展開を粉砕せよ！！

我々はかかるKICA、朴成準一派の民団神奈川県本部事務所不当占拠に対して、斗う民団神奈川、韓青同等の果敢な、KICA＝朴政権、そしてこれを背後から支援する日帝権力に対する二重対峙・糾弾斗争を断固として支持していかねばならない。そしてマスコミ報道管制を敷き、事件の本質を「在日韓国人内部の内輪もめ」と排斥主義をあたりたて、KICA直接指揮下の朴成準一派を擁護し、反朴民主勢力の県本部実力奪還斗争に妨害を加え、不当弾圧を続けている日帝権力＝神奈川県警の不当政治介入を粉碎していかねばならない。

そもそも神奈川県警のかかる不当介入は、①昨年十月の最高裁に於ける朴成準一派に対する②民団神奈川県本部事務所占有妨害の禁止及び③民団神奈川県本部の名称使用禁止という「法的措置」すらも

反古にした正真正銘の政治的介入・弾圧であり、④いわゆる「文世光事件」後に結ばれた権名密約＝在日朝鮮総連に対する非合法化策動、在日「韓国」人の政治活動の禁止、反朴民主勢力への弾圧を実施していかねばならない。これらの斗いは日帝政府・政治警察にいたり、在日「韓」国人に対する先行的・計画的攻撃は一環である。我々は、日帝の朝鮮侵略・反革命戦争準備の態化する政敵である。我々は、日帝の朝鮮侵略・反革命戦争準備の一環で、在日「韓」国人に対する先行的・計画的攻撃を断固粉砕していかねばならない。これらの斗いは日帝政府・政治警察にいたり、在日「韓」国人の民主回復・朴打倒の斗いに応え、日帝の韓青同諸君への県警出頭命令、在日「韓」国人内の分断攻勢等々をおこなつたが、反朴民主勢力の県本部を使用を凍結する新らたな攻撃、我々は、在日「韓」国人への民族的民主的諸権利ハクダツ等の攻撃を紛碎していかねばならない。

戦後支配体制が根底から動搖する中で、日帝国主義は排外主義・差別主義・権成主義のイデオロギー攻撃を教育への反動化を要にかけてきている。「朝鮮人不法入国者が五万～十万潜伏している」「総連系と民団系の抗争が激しくなっている」と排外主義を立て、密告を強要するなどを通じて在日朝鮮人に相互の不信を植えつけ、分断を計り、「入管法」の五度目の国会議上程と外国人登録法の改悪を通じて日帝の在日朝鮮人支配・攻撃を集大成しようとしている。我々は、朝鮮侵略・反革命戦争の遂行に向け、その先行的・国内的展開たる在日朝鮮人に対する政治的弾圧に対して果敢に斗い抜く、在人朝鮮人の斗いを支持し、日帝の攻撃・弾圧を粉砕していかねばならない。

## 日帝の朝鮮侵略

### 反革命戦争を打ち砕け

今回の事件を契期に形成された「民団神奈川県本部事務所不法占拠を怒る実行委員会」は三・一三糾弾集会、四・二大衆集会、四・一大衆集会とKICAと日帝のユ着とその構造に対する批判・糾弾を展開し、斗う朝鮮人民との運動的連帯を克ち取ってきた。しかしその内には、日本政府に民主主義と司法への不介入を求める「現状回復」要求という思想的限界や、この問題を親朴派も朝鮮人には変わりがないからと、問題の階級的本質を彼岸に追いやり、「民族差別」の構造的問題にのみ事態の本質をねじ曲げ様とする「態度保留」派の超階級的態度迄をも混在化させ、七・七華青斗告発以降の我々内部の斗いの総括とその止揚が未だに充分でないことを露呈している。そして四月八日の「強制代執行」の中で一定程度の要求が克ち取られる段階に至る中で、その思想的・運動的限界をもたらしている。

在日朝鮮人六五万の内三〇万人の人々が外国登録法に基づいて強

制退撃を強要され得る状態に置かれ、入管体制の下で政治的弾圧と強制送還が日々展開されている今日、我々は、在日朝鮮人の民族的民主的諸権利獲得斗争を弾圧支持し、日本帝国主義の在日朝鮮人に対する諸権利ハクダツの諸々の策動を粉碎し斗い抜かねばならない。そしてこれらの斗いを日本帝国主義の朝鮮侵略・反革命戦争を紛糾し日本帝国主義を打倒していく斗いへと高め上げ、金芝河氏の「日本人への提言—反朴反日統一戦線」や、血の弾圧に抗して民族民主の旗を高々と揚げ朴ファシズム体制と果敢に斗っている朝鮮南部人民の反米・反日・朴打倒の民族解放・民主主義革命に朝鮮人民の自主的平和的祖国統一斗争に連帶していかねばならない。

我々は、ひつ追する朝鮮階級情勢への日本帝国主義の朝鮮侵略・反革命の強化—戦争準備を革命戦争で打ち破り、日本帝国主義打倒・米帝国主義追放・プロ独裁樹立の斗いとしてこの斗いを戦い抜いていかねばならない。この道こそ朝鮮人民の斗に対する抑圧民族としての我々の唯一の道であり、抑圧民族としての歴史的総決算である。

共に斗わん！

- ☆日帝の朝鮮侵略反革命を革命戦争に転化せよ！—戦争を革命戦争で打ち破れ！
- ☆天皇制打倒・安保粉碎・日帝打倒・米帝追放・プロ独裁樹立・社会主義革命、に突き進め！
- ☆朝鮮人民の自主的平和的祖国統一斗争断固支持！
- ☆南朝鮮人民の反日反米朴打倒の民族解放民主主義革命断固支持！
- ☆K C I A・朴成準一派の民団神奈川県本部占拠糾弾！
- ☆日帝の在日朝鮮人弾圧粉碎！

# 日帝の産軍複合体制を 更に暴露し、更に追撃せよ！ ロッキード事件を弾劾せよ！

のである。現在、進行する日帝の朝鮮侵略反革命戦争の準備は日米安保体制の後盾の中でこそなしうるのであるが、田中一二クソン会談の新朝鮮条項成立の背後には、今回暴露されたように帝国主義の利権がからまつており、あらゆる侵略のための理論も、極めて唯物的な現実の前には何の役にもたたないのである。我々はこうした帝国主義ブルジョワジーの醜悪な現実をあらゆる面で暴露し、プロ独立のための武器としていかなければならない。ロッキード事件をスキャンダルとしてではなく、革命の立場で撤底的に暴露し糾弾していかなければならない。

ロッキード事件糾弾！  
プロレタリア階級独裁樹立！  
社会主義革命へ！

本年2月、米多国籍企業小委員会で暴露されたロッキード社の汚職事件は、またたく間に国際的ひろがりをみせ、米、日を始めとした世界帝国主義諸国を体制的危機をもまきおこさんほどの混乱に陥し入れている。現在、あらゆる階層からロッキード事件弾劾の声が巻きついているが、政府一企業の腐敗した構造を暴露し、それを取り除くという段階に止まるならば、同種の事件は更に繰り返されるであろう。我々は何かしら立派な政府や企業があつて、それがたまたま腐敗したから今回のような事件が起きたのだと毛頭考えていない。ロッキード事件は多国籍資本が自からの延命のために必然的に起こした事件であり、資本主義が必然的に生み出す構造を持ついるのだということを暴露していかなければならぬのだ。それ故我々はプロ独立・社会主義革命の立場から帝国主義、多国籍企業の構造を暴露し、これを打倒していかなければならない。

ロッキード事件暴露の背景には、ベトナム・インドシナにおける米帝の敗退とウォーターゲート事件の暴露からニクソン退陣という米帝の体制的危機を、チリ反革命におけるCIAの暗躍の暴露を通して、CIAや多国籍企業に予盾を転化し、民主的ボーズをもつてアメリカの国家的、国民的統合をなそうという戦略がある。米帝の国家的統合とは粉れもなく、朝鮮を始めとしたアジアや中東への侵略反革命体制の構築である。まさにポストベトナムの帝国主義体制の強化のためのブルジョワジーどもの大手術こそ、今回のロッキード事件であり、ボーイング、グラマン、ダグラスの航空機産業、ガルフ、エクソンなどの石油メジャー、ITTなどのコングロマリット、更にCIA等の告発、暴露なのである。

多国籍企業は帝国主義の侵略の先兵であり、日帝ではその役割を「商社」が果たしている。しかし、過剰資本、過剰商品のはけ口として資本投下し多国籍企業として成長しつつも、長期化する不況と国際収支悪化の中で肥大化した多国籍企業はその脱出のために、汚職の構造と、「死の商人」としての軍需産業化、産軍複合体制への転化を必然のものとしていったのである。

今回のロッキード事件の日本に於ける眼目も、全日空へのトライスター売り込みというよりも、対潜しょう戒機P3Cの売り込みにあつたことはいうまでもない。こうした中で、我々がはつきりとみておかねばならないのは、まず第一に、商社、多国籍企業批判も一部的なものであり、帝国主義の基本戦略は依然として、朝鮮、中東侵略反革命体制の構築にあり、第二に、「死の商人」としての軍需産業、産軍複合体制の肥大化として中東、アジア、アフリカ等への武器輸出であり、第三に、米国におけるCIA、日本における児玉、誉士夫等をスケープゴートにしつつも、より強力なファシズム的統治形態への権力再編を目論んでいることである。現に日本においては児玉をスケープゴートにすることによって民族派右翼や純正右翼の抬頭が著るしく、新たな天皇制ファシズムの形成へと進行せんとしているのである。更に、ロッキード事件は、米一日一「韓」の黒い癒着をいみじくも暴露したのであった。

我々は敵の予偽をむしろ革命の武器に転化して更に追撃していく